

特集

Rare tumor の最新知識

企画者のことば

岡本愛光*

Rare tumor, つまり希少がんとは人口 10 万人あたり 6 例未満の稀ながんであり、数が少ないがゆえに診療・治療上の課題がほかに比べて多いがんである。婦人科腫瘍は組織型が多様なため多くの希少がんがあり、その治療方針決定に難渋することがある。

2000 年以前は、婦人科悪性腫瘍の管理において、「one size fits all」の時代であった。2003 年にヒトゲノム計画が完了し、ゲノム時代が到来すると、婦人科がんのすべてのサブタイプの配列が決定され、ほぼ同時期に、病理診断の精緻化が進み、希少腫瘍の無数の症例報告や大規模データベースを用いた希少腫瘍の報告が蓄積された。現在、がん研究としてゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームを統合的に解析する「統合的オーム解析」が世界中で行われている。オミクスデータの最終産物としての臨床病

理情報を解析に取り入れることで疾患の背景にあるメカニズムの解明、創薬ターゲットの同定、バイオマーカーの開発が期待されるが、希少がんに関しては数が少ないゆえにまだ時間がかかりそうである。さらに希少がんの臨床試験を立ち上げることは困難で、国際共同試験として症例を少しでも増やし行うか、臓器をこえたいわゆる Basket trial で実施する必要がある。しかしながらわれわれはまさに今、臨床の現場で希少がん症例に直面することがあり、最新の情報を集め患者さんのために最適な治療を提供しなければならない。

この特集では、婦人科腫瘍領域の希少がんのなかでも治療ガイドラインであまり触れられていないが稀に遭遇する腫瘍にスポットをあて、その最新の情報をまとめた。本日から臨床に役立てていただければ幸いである。

* Aikou Okamoto 東京慈恵会医科大学産婦人科教室(主任教授)